

会報

No. 39

平成8('96)年3月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL(075)771-0069



図書館感

園部町立図書館長

小嶋 一夫

昨年、ウィンドウズ95の日本語版の発売が話題を呼び、田舎の町の本屋さんにも解説書が並び出した。時代の急激な変化は、レファレンス・ブックを越えて、今まで、紙片、フィルム、テープなど、それぞれ異った形態で記録されていた情報が、すべてコンパクトに収録され、やがてインターネットの環境の中に組み込まれていくのであろう。



本といえば、印刷された紙片が、製本され、あるいは仮綴じされて一冊にまとめられたものというように定義されている。もう二十年近くも前に、エリック・ド・グロリエが、ポール・オトレの下したへある知的与件を表わす符号をその上に記した、ある材料とひろがりからなる一つの「ささえ」というのが、一般的でよく現実合致した定義であると述べているのを読んだことがある。確かに今や図書館には、いわゆる本以外に、フィルムやテープなどいろいろな種類の資料が整えられてきた。

よく本には「読む」本と「調べる」本とがあるとされたが、「見る」本、「聞く」本があるということになる。もともとそれをも本というのは牽強付会かもしれない。私の勤める町の図書館では、「読む」本の利用が圧倒的に多い。「見る」本、「聞く」本の整備は、現在計画中の新しい図書館の誕生に待つところである。

新しい学習指導要領では、社会の

変化に対応し、心豊かにたくましく生きる力を身につけるため、自ら考え、主体的に判断し、行動できる資質や能力の育成をめざしている。文部省でも、こうした新しい学力観に立つ教育の中で学校図書館が重要な役割を担うものとして、平成五年度から学校図書館図書整備新五カ年計画を策定し、学校図書館図書標準という学校の条件整備の目標まで本を備えるために必要な図書費を地方交付税で措置することを進めている。こうした教育改革における学習指導の下で、児童・生徒が本を利用していく生活習慣を身につけていくことは、将来の公共図書館の利用者として期待できることから、大きな楽しみである。町の図書館でも「読む」本から、「調べる」本への要求も高まってくるのではないか。当町の図書館では、スペース的にも、経費的にも限られているが、「調べる」本、レファレンス・ブックの更新、充実を図っているところである。

京図連協・業務研究集会

「歴史から学び、充実した仕事を」―河井弘志氏を迎え研修会―

一月二十六日に、研修研究委員会の企画による二つの形式での研修会が京都市下京区合同庁舎会議室にて開催されました。

午前中は、河井弘志氏（立教大学教授）が、「これからの日本の図書館のあり方―欧米の図書館の歴史から考えること」という題で次のような内容の講演をされました。

・「状況」という限定された場にあっても理念をもち、生きているという実感を利用者と共有できる仕事にしていくことが大切。

・利用者が生きていくうえで一番大切なもの（知恵）を受けとってもらえらるるに、図書館が具体的な活動を通して発信源になっていき、その活動を広くひろめていくことが必要。

・利用者にとって、図書館が単なる学識ではなく「人間としての知恵」を身につける場となるようにしていくことが肝要。

・利用者が必要とする本をすぐ取り出せるようにすることをサービスの最優先に。

・日頃から、多くの本を知り、目録を知って、著者の評価ができるよ

うになることを心掛ける。

以上、十八世紀半ばからのドイツにおける図書館観の中で図書館員と利用者がどのようにとらえられてきたかを基軸に話を展開されました。

参加者から、家庭と学校から放り出された行き場のない児童が、図書館に通っているうちに、読み聞かせなどを通じて、自分の中にあるものを変え、まわりの人が驚くほどに

「知恵」を身につけることができた事例が話されました。

午後は、図書館資料の選択から廃棄（除籍・リサイクル）までの業務についての事例発表でした。

向日市立図書館（鎌田高明氏）からは、規定の整備をして行っている実情が話されました。

宇治市中央図書館（小寺美佐江氏）からは、全員が参加しての選書作業や、寄贈図書を中心として選択から活用までの流れや、除籍・リサイクルの試みの説明がありました。

その後、大西委員を中心としてまとめられた東京都中野区・八日市市等のリサイクル事情の報告をして十余の質疑があり、長時間の日程を終了しました。

理念と現状を思う

京都市南図書館

野田 朱実

今回の研修会は「理念と現状」という言葉に全てが集約されていた。

講演では、河井氏が最初に述べられた「司書という仕事を、そして図書館を本人や周囲がどのように認識しているか。」ということに大変考えさせられた。というのも、私自身、日々の業務に追われ真剣に自ら考えず、認識しているつもりになっていないとは言えなかったからである。

そこで図書館の理念について、ドイツの図書館にかかわった人々の歴史からお話を聞いたのは興味深かった。何百年もの紆余曲折を経て、今日の図書館の基礎が築かれ、その点

が投げかけられた理念というものに對する答えを導く要因と成り得るのではないかと思った。

研修では、選書の難しさがよくクローズアップされている一方、その後の除籍やリサイクルの問題を考える点が有意義であった。

研究発表された館以外も除籍等に関するアウトラインを出して、その点での相互協力の必要性も感じた。

各々そして図書館界自体が認識する理念に現状が追いつくには、越えなければならぬ壁は多いが、それを克服する時期ではないかと今回の研修会を通して強く感じた。

よみがえれ、君たちの青春をもう一度!!

田辺町立中央図書館

中川 新也

年間に買われる本は、なんと十三億冊。文字の並び方によって、とてもない文章が生まれる。なんと楽しいことだろう。しかし、その本も扱いはまちまち。

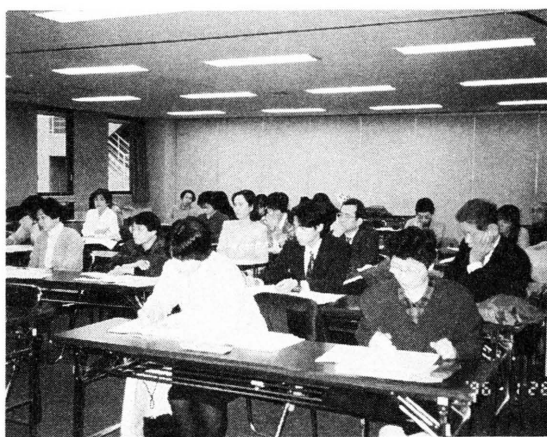
・十分に利用され、多く読まれて満足している本。

・見る訳じゃないけど自分の宝物のようにずっとそばに置いておきたい本。

・一度読んだら捨てられる本。

・一度も開かれなかった寂しい本。

「今度、遠くへ引っ越しするんで



す。捨てるにはもったいないし、まだ綺麗だし図書館で使ってもらえませんか。」

「活用については図書館にお任せください。」と、本をいただく。

中には、すごい本がある。これはもうけもの。もう売ってないし、図書館にも所蔵してないし、ラッキー。でも、かわいそうなのは、その他の本。どこへ行くんだろう君たちは？ 回し回され捨てられるのか。図書館員でありながら本を捨てるのは心が痛む。せめてリサイクルで、君たちの青春をよみがえらせられないか。今回の研修会は、リサイクルを通して、捨てられる本の気持ちを考えさせられました。

もう一度、読んでほしいな、ぼくたちを！

ニュース

News

「府立図書館改築」報じられる！

左記、いずれも京都新聞より

2/9夕「府立図書館を全面改築蔵書を資料館と統合―知事会見」

2/15夕「府立図書館を新図書館に全面改築するための基本計画策定費二千万円を計上―九六年度予算案」

2/22「新府立図書館構想 情報ネットの中核に―府教委」

京図連協研修研究委員会『児童・青少年奉仕研究グループ』研修会報告

「赤ちゃん絵本について考える」

八幡市立八幡市民図書館

出口 宏子

同研究グループでは、今年度「赤ちゃん絵本」にテーマを絞り、三回の予定で研修会を開催することとなりました。

参加者全員が、自館における赤ちゃん絵本のレポートをし、発表するという形式で行われました。そして、そこで検討され意見交換されたことは、各自、各図書館で実践され、その結果を持って、次回集まり、検討されます。

各回とも予想を上回る参加者の中、第一回目は各館から十冊の赤ちゃん絵本を持参していただき、利用の様子などを発表していただきました。それを受けて二回目は、一冊の赤ちゃん絵本に絞って更にレポート、その定義、必要性などについて意見が出されました。更に三回目は、利用者の発掘、アタックの方法などについて考えることになりました。今後、こういう形式で、研究グループとして継続的に研修が行われればと思います。

研究主題

「情報化社会に生きる子供と図書館」

◇平成八年一月十八日(木)

午前十時半～午後四時

◇京都市生涯学習総合センター

□講演『子供の読書環境を考える』

京都市特別社会教育指導員

吉見 昭一氏

□事例発表

・草津市立・井手町

豊中市立岡町図書館

□研究協議(司会・西宮市・奈良県立奈良図書館)

読書環境が変化するなかで、

子供の生活の中に、いかに読書を定着させるか、公共図書館は

何ができるか何をしなければな

らないか等について、百十二館、

百四十名の参加者が熱心に研究

協議を行った。

講演では、生活体験と本に出

会うことの大切さと、図書館は

体験の寄り合う共鳴箱となり、

主体的な子供を育てる場であると説

かれ、また、事例発表では、草津市

から、チームワーク、おはなし会等

の行事の大切さを、井手町から、資

料の種類の垣根を越える図書と視聴

覚資料の相乗効果について、豊中市

から、積極的な館外サービスとネッ

トワークの重要性について発表があっ

た。

図書館の児童サービスについて

向日市立図書館

岡本 三容子

今回の研修に参加して、草津市・井手町・豊中市の各図書館における、児童サービスの事例発表を、当館と比較しながら聞かせていただきました。親やボランティアと協力し、催し物や研修会を開催している図書館、視聴覚資料を一つの目玉にし、子供を引き寄せている図書館、また、館内に留まらず、積極的に外に出ての活動や、文庫や団体貸出に力を入れて後援している図書館、それぞれに特色のあるサービスを実施されていると思いました。

向日市でも、研修で学んだことを役立て、なお一層、子供にとって魅力的な図書館にしていけるよう、努力していきたいなと、思いました。



二月八日、平成七年度近畿公共図書館協議会参考事務部門研究集会が京都府総合教育センターを会場に二七人の参加を得て開催されました。

前神戸市立中央図書館資料課長稲本吉次氏の講演では、レファレンスの目的を「貸出をのぼす」ためだけだろうかと問題提起、レファレンスによる資料提供が必ずしも貸出につながらない例を紹介されました。

レファレンス担当者の心がまえとして、幅広い知識と教養・旺盛な知的好奇心・世話好きで機転がきく・偏見をもたず、柔軟な思考の四点をあげ、これは図書館員に備えてほしい資質でもあると指摘されました。

近公図参考事務部門研究集会

また、利用者への対応を通じて、質問を確認し資料探索のための情報をたくさん集めることが大事である。使いこなせるレファレンスブックをたくさん持てれば自信になると資料を知ることの重要性を永い経験に基づいて話されました。

事例発表で、彦根市立図書館の田中尚弘氏は彦根藩資料の提供に際して人権に配慮して提供されていること、岸和田市立図書館の春崎孝雄氏は独自の地域区分表と新聞記事索引・雑誌記事索引作成の紹介がされました。京都府立総合資料館の長谷川匡男氏からは、地図作成の歴史をふ

まえ、地図から多様な情報がよみとれることを現物も示しながら興味深く話されました。

資料を知ることの大切さを痛感

久御山町立図書館

森本 三貴子

「参考業務の基本と郷土資料レファレンス」をテーマに、前神戸市立中央図書館の稲本吉次氏の講演他三館から事例発表がありました。

講演では『レファレンス担当者の理想は①幅広い分野にわたって知識と教養を持った人 ②知的好奇心の旺盛な人 ③機転のきく人 ④柔軟な考え方のできる人 である』と話され、自らの現実と理想とのギャップに恥ずかしさを感じました。また、実例を交えてのお話しに、利用者の幅広い質問・要求に答えるために、「資料を知る」という日々の勉強の積み重ねの大切さを実感しました。

また、事例発表では、郷土資料は館独自の分類・整理をされていること、二次資料を作成しレファレンスに活用されていること等大変参考にさせていただくことができました。

レファレンスサービスは日常の忙しさに追われて受身になっていましたが、「資料を知る」という原点にかえって勉強していかなければならないと痛感した一日でした。

新加盟館紹介

網野町生涯学習センター図書室



読み聞かせのひととき

当図書室は、平成四年二月にオープンした、中央公民館的、図書館的な機能を持つ「網野町生涯学習センター」の一角にあります。この建物は民間の社員寮を借り受け、改装・整備をして使用しており、元食堂の図書室は九十六平方メートルと狭いものです。

センターの職員は、非常勤特別職の館長と職員一名で、図書室の業務もこの二人で行っています。年末・年始、国民の祝日、月曜日、第一、三日曜日以外の日の午前十時から午

後六時まで開室しています。

開設時は四千冊だった蔵書も、四年たった今では約一万五千冊になり、狭い図書室にはこれ以上配架できなくなりました。複本や古くなった本、利用度の少ないものは書庫に移し、新刊を並べていますが、人口比から考えても現在の二倍以上の蔵書は必要であり、その購入計画と配架スペースの確保が今後の大きな課題です。一人六冊まで、二週間を限度として貸出していますが、その管理はすべてコンピュータで行っています。面倒がなく、迅速な処理は利用者からも大変喜ばれています。

登録者数は、町人口の二割弱に当たる三千二百人です。年間貸出冊数も年々増加しており、今年度は昨年度より三千冊多い四万八千冊以上、住民一人当たり約二・八冊になる見込みです。

このように伸びてきたのは、第二、四土曜日のボランティアによる「読み聞かせ」、絵本・童話作家の「講演会」、今年度より発行しだした「図書室だより」など、継続した活動の成果であろうと思っています。

「京図連協」への加盟をきっかけに、今まで以上に職員の研修や図書館サービスの向上に努め、町民の間に図書館設置の声が広がり、まとまっていこうと頑張っていきたいと考えています。

ロンドンの公共図書館を訪ねて

宇治市中央図書館

中澤 美佐子

昨年十一月、海外自由研修として、ロンドンを中心に、大小の特色ある図書館を訪ねました。訪問したのは、サットン中央図書館と分館二館、その隣のクロイドン区の中央図書館です。

サットン区は、人口約十七万人で宇治市と規模が似ており、ロンドンから車で一時間位のところにあります。中央図書館は、区役所との複合施設で、玄関の上部に「SUNDAY OPENING」の大きな看板が掲げられ思わず注目してしまいました。チーフライブラリアン BUNDY 氏がにこやかに迎えて下さり、沢山のパンフレットをもとに説明を受けました。

図書館システムは、定置館が九館、移動図書館二台（一台は身体の不自由な人の家を巡回）で形成されています。目下、最大の取組みは、例の看板「日曜日開館」で P R の真最中とのこと。コンピュータは、検索すると所蔵資料の他に地域の関連情報も得られることで地域の拠点としての図書館の位置付けが分かりました。



日曜開館を報じるサットン図書館 P R ビラ

見てきた外国の図書館

イギリス・香港

分館二館が、いずれも児童室、レファレンス室は確保され、地域サークルコーナーも目立つ場所にあり市民への浸透が窺えます。

クロイドン区は、サットン区の二倍の人口規模で、図書館は百年近い歴史があり、初めて児童奉仕を実施した館として有名です。

外観は昔の建物をそのままに、内側をモダンに設計されています。とりわけ、児童室の素晴らしさに目を見張りました。全体が海のイメージでまとめられ、五才以下の子供の利用を促進するため、工作室・授乳室・トイレを備え受入れ体制も万全でした。

この他、バービカン図書館、大英図書館、オックスフォードのボドリアン図書館など連日駆け足で回りましたが、イギリスの図書館事情の一端に触れてみて、その質の高いサービスや市民への浸透の背景に目をあげての振興があったことを実感



サットン区図書館分館 CARSHALTON Library

しました。

香港の公立図書館見学記

精華町立図書館

澤田 種治

香港は来年には主権が中国に戻ることになっています。そこで、京都府内の図書館職員を中心とする八人は、これまで知ることのなかった香港の公共図書館を見学するため、二月十六日から四日間わたって、旧正月を迎え歳末で賑わうこの国際金融都市を訪れました。

香港の行政組織は、香港島と九龍地区を管轄する市政局と中国に隣接している新界地区を管轄する区域市政局があり、公共図書館は前者が二十七館、後者が二十二館をもっています。

図書館訪問は、十七日（土）に行いました。どの館でも週末の賑わいを目のあたりにすることができました。午前中に新界地区にある沙田中央図書館（三、二五〇㎡、三十三万冊）を訪ねたところ、何副館長が物静かに説明と案内をしてくださいました。

この館の奉仕人口は約四十五万人、登録者は約二十万人、貸出冊数は月平均十二万冊、開館時間は平日九時から二十時で木曜休館というものでした。

館内は

成人・児童・参考

図書室・

学生学習

室が各独

立してあ

り、中国

語と英語

の図書がほぼ三対一の比で別配架していました。利用者端末が各所に置かれてよく利用されていました。

午後からは市政局の中央図書館と地区図書館である枝角公共図書館を訪ねました。中央図書館では麦館長が九十八年には新中央図書館が完成する、三・四年後には図書館を四十二館に増加させたい、市政局館内の年間総貸出冊数は千七百七十万冊に達する人口三百三十万人、児童用マルチメディア室がある等々熱心に説明と館内案内をされました。

今回の訪問で特に印象に残ったことは、予約料・延滞料の徴収、豊富な数の利用者端末、視聴覚資料サービスの充実、電算機の活用で図書館間の相互利用が図られている等で香港の図書館の一端を知ることができました。総じてイギリスの影響を多く受けていることを感じるとともに九十七年以後は中国の図書館政策とどのように融和させるのか、香港のこれからの図書館活動について、さらに興味を持たせてくれる見学旅行でした。



手前は児童コーナー、ガラス向こうは学生学習室（枝角公共図書館）

特別展「京都の震災」

を開催して

京都府立総合資料館

平成七年十一月一日～三十日まで所蔵資料による展覧会を開催しました。京都府は永く都であったために、記録や資料が多く残されていて、どの程度の地震があったかということ、は、比較的よくわかります。一番古い記録は、飛鳥時代の大宝元（七〇一）年の冠島が舞鶴沖にできたといわれる地震で「続日本紀」にでています。文政十三（一八三〇）年の地震の時には、京都町奉行所から余震の続くその日にまず火の用心が、翌日には大工、左官、屋根屋等の地震を口実とした値上げを禁止し、さらに流言蜚語の禁止も命じる「御触」に当時の震災対策が伺えます。昭和二（一九二七）年の北丹後地震での列車転覆・道路亀裂等の被害状況、丹後機業が蒙った被害、三七八万円にもなる義援金や救援活動、復興対策等今に通じるものがあり、熱心に観て回る人々が見受けられました。北丹後地震を直接経験された方など四千人を超える入場者があり、地震への関心の高さを感じました。「京都って意外に地震が多いんじゃない」「防災対策をもっとしとかなとあかん」といった感想が聞かれました。

専門委員会 ニュース

◎相互協力委員会

平成七年度相互協力実務担当者会議を、三月八日、亀岡市立図書館で開催し、二十一館から二十五名の参加がありました。初めに、前回相互協力委員会での問題提起をうけ、日図協理事、三苦正勝氏に「資料収集と相互協力の課題」という題で講義をしていただきました。講義では、まず読書、研究というものは、一人でする事が基本であり、個々人の資料要求に一つづつ答える事なしに、図書館サービスは成立しないという事が示されました。その上で、資料の収集、基準、選書の姿勢、予約（リクエスト）サービスの重要性について具体的な例が示されました。京都のFAX版WANTEDの参考となる、神奈川県WANTEDで、開始後年を経て抱えた問題点の指摘、滋賀県立図書館の市町村支援の実態にもふれられました。予算の少ない図書館では選書ができなくなっても、予約（リクエスト）を優先させて本を購入し、利用者の要求に答えるべきだという事でしめくられました。その後、質疑、討論に入り、WANTED掲載の資料について、各館の現状について、相互貸借において借

り受けの多い館、貸し出しの多い館相方から活発に意見が出されました。また府立図書館への質問や要望も寄せられました。

◎研修研究委員会

今期の反省のうえにたって次期委員会に次のことを願います。

＊「どの館のどの職員も、いつでも参加でき、いつかは役に立つ内容の研修研究活動を！」また「どの委員にも活躍してもらえる運営を」という方針を強化していただきたい。

＊似たような顔ぶれの講師・参加者にならないように工夫して欲しい。

なお、新委員長が決まれば、年度

替わりの多忙な中ではあるが各館は委員の選出に協力され、委員諸氏は研修計画の企画に向けて意見を出せるように研究をつづけて欲しい。

◎広報委員会

第四回（今期最終）委員会を三月二十六日に府立図書館にて開催し、総括と次期委員会への引継ぎ事項の整理を行います。

各専門委員会や加盟館職員の皆様には、記事や写真提供などいろいろとご協力をいただきありがとうございます。

「会報」が人の面でのネットワークづくりの一助となるとともに、会や府内図書館活動の跡付けとなつてゆくようにと祈念いたします。

第三回理事会開催

平成八年三月一日（金）京都府立図書館で第三回理事会を開催しました。

事務局から、第二回理事会以降の事業、市町村法令外負担金部分承認について報告。各委員会委員長から、年度末に向けての取組みも含め報告。

協議事項は、①平成七年度会務報告（案）②平成七年度収支決算（見込）

③平成八・九年度役員の選出、の三点で、必要な修正ののち確認されました。

なお、理事の決定・報告を三月末日までに、各委員会委員の選出を四月中に行い、事務局あてに報告することになりました。

また、八年度総会は五月二十四日（金）を予定日とし、準備を進めることとなりました。〈事務局〉